Tsukuba Psychological Research
1996, **18**, 105-116

子どもの社会性に対する動機づけからのアプローチ

筑波大学大学院(博)心理学研究科　松尾　直博

筑波大学心理学系　新井邦二郎

A review of motivatinal approach to children's social development

Naohiro Matsuo *(Doctoral Program in Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)*
Kunijiro Arai *(Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)*

In this article, we criticize limitations of present approach to social development in children and suggest a new approach which emphasizes motivational role was suggested. First, literature on relations between emotions and children's sociability are reviewed in the term of urge theory, emotional expression, emotional regulation, emotional competence, social anxiety, and so on. Second, roles of goals in social situations are reviewed. In addition, psychological constructs (such as internal working models and personal theory) which effects these emotions and goals are also reviewed. We suggest that emotions and goals play important roles in children's social development, and that psychological constructs might guide children's social development.
Key words: social development, emotion, goal, motivation, children.

問題と目的

近年，教育の現場や研究者の間で子どもの社会性の変化やその危機が叫ばれている．そうした現状に対応してか，子どもの社会性に関する研究は，現在の発達心理学において最も注目される領域の一つとなっている．現在こうした研究の多くは，外に現れた行動に焦点を当てた社会的スキルの観点や，そうした行動を産出する認知的過程に焦点を当てた社会的情報処理の観点から行われている．

社会的スキルや社会的情報処理からのアプローチは，多くの知見と臨床的応用へ可能性を提供し，子どもの社会性を理解する現在のアプローチとして主流となっている．しかし，いくつかの限界や問題点も指摘されている．例えば，子どもの社会的情報処理に関する数多くの研究を行っているDodge自身が述べているように，こうした観点は「行動がいかにして仲間関係に影響を与えているのか」「いかにして社会的行動が産出されるのか」といったhow questionに対する解答しか提供してくれない(Dodge, 1993)．つまり，社会的情報処理のステップで不適切な処理をしてしまう子どもは，faulty computerであるとみなされ，それ以上の説明はされない(Sorrntino & Higgins, 1986)．情報処理の考え方は，入力された情報を処理し，何らかの結果を出力するというコンピューターの機構を基にしている．そのコンピューターが，人間の心の働きのなかの“cold cognition”の部分の働きを基にしてつくられていることを考えていると，それを基にして考えられた人間の心のモデルはいわば逆輸入的なモデルであり，それに固有の問題点があると思われる．子どもの社会性について，より深い理解を行い，臨床的介入につなげていくには，「なぜ，そういった行動を行うのか」あるいは「なぜ，そういった情報処理を行うのか」といったwhy questionについても探求していかなければならないと思われる．

それに関してDodge, Asher & Parkhurst (1989)は，コンピューターの活動と子どもの行動との本質的な違いは，コンピューターは行動を自ら方向づけない，すなわち動機づけられていないのに対して，

子どもは常に目標を設定し，自分の行動を方向づけることを学習していることである」と述べて，動機づけの持つ意義を強調している．また，相川・佐藤・佐藤・高山(1993)は社会的スキルに関する数多くのモデルを概観しているが，それらの多くのモデルが構成要素の中に「動機づけ」「動機」「目標」「感情」などの動機づけに関連したユニットを想定している．コンピュータの活動はその活動の目標が使用者という機構の外部の存在によって設定されるのに対して，人間の行動の場合は行動の目標をその人間自体が設定しているところに大きな違いがあると思われる．

つまり，子どもは入力された情報を周囲の人間(親や教師)の設定した目標にただ合うように外から動機づけられ，それに従い何らかの行動を行う受動的な存在ではない．もし，子どもがそういう存在でしかないならば，ある状況において周囲の大人が期待するような行動をとれない子どもはfaulty computerであるのかもしれない．しかし，実際には周囲の大人からの影響があるにしても，最終的に自らを動機づけるのは子ども自身である．子ども自身が目標を設定し(しばしば本人も意識できない場合もあるが)，喚起される感情によって動機づけ状態が定まり，それを満たすような行動が選択され実行される．このような結果，産出された行動が周囲の人間が期待していたものと違っても，その子ども自身にとっては正しい情報処理であるとも考えられる．

本研究では，子どもの社会性について動機づけの観点からのアプローチを試みる．Ranbiner & Gordon (1992)は，子どもの仲間関係に関する研究者が，近年になって「動機づけ要因」に関して研究するようになり，それらの研究(Blodizar, Perry & Perry, 1989; Crick & Ladd, 1990; Renshaw & Asher, 1983)の結果は，動機づけ要因が，子どもの社会的コンピテンスにおいて重要な役割を果たしていることを示していると述べている．本研究では，子どもの社会性について動機づけの観点からのアプローチを試みる．動機づけは，「行動を引き起こし，その行動を持続し，一定の方向へ導く過程」(高野，1994)と一般的に定義される．ここでいう，行動を幅広くとらえた場合，当然そこには社会的な行動も含まれていると考えられる．しかし実際には，学業達成場面での学習行動について多くの研究が動機づけの観点からなされているのに対して，社会性の理解においては動機づけの要因はあまり重視されていない．今日，教育現場で問題とされているいじめ，不登校，引きこもり，非行などの問題も「社会的行動を引き起こし，その行動を持続し，一定の方向へ導く過程」の問題，すなわち社会的動機づけの問題としてとらえた方が，ただ単に「スキル不足」「社会的情報処理の誤り」としてとらえるよりも解決策を模索しやすいのではないかと考えられる．このように，子どもの社会性について動機づけの観点からアプローチすることは，既述したような現在までのアプローチの問題点に対する答えを与えてくれるように思われる．本論文においては，動機づけ要因の中でも喚起された感情と設定した目標が，児童の社会的行動に与える影響を検討した研究を中心に概観していく．

感情は，古くから理性と対比してとらえられている．現代社会においては，人は感情を抑えて理性的に振る舞うことがよいこととされる傾向があり，感情を適切に制御して行動することが，子どもの社会性の発達においても不可欠である．しかし，実際にはすべてが理性的な判断によって行動が導かれているわけではなく，感情が行動に与える影響は強いと考えられる．また，自ら目標を設定し，それに向かって意図的に，持続的に活動する目標志向性は，人間が他の存在と異なる点のひとつだと考えられる．ある場面で個人が設定した目標も，社会的行動に大きな影響を与えていると考えられる．

今まで，あまり焦点を当てられていなかった感情と目標を重要な概念としてとらえることで，子どもの社会性を理解する際に存在していた限界や問題点を一定程度乗り越えることができると考えられる．以下に，子どもの社会性と感情，目標，さらにそれらの変数に影響を及ぼしていると思われるBowlbyのアタッチメント理論，Epsteinの現実についての自己理論について概観していく．

1．子どもの社会性と感情との関係

村田(1992)が述べているように，今世紀初頭に台頭した行動主義，その後主流となった認知主義は，科学的な心理学から感情を排除した．しかし，今までとは異なる観点からの感情のとらえかたが生まれ，再び発達心理学の俎上にあげられようとしている．「認知的情報処理システムはあくまで情緒による動機づけシステムのサブシステムであり，実際の行動の決定は握っていない」と丹羽(1993)が指摘しているように，人間行動の重要な変数である感情を無視しては，「なぜ」その行動が生ずるのか，という問に対しての理解は困難であるように思える．

実際，感情の役割を無視した情報処理モデルに対する批判を述べた論文もあり(Dolgin, 1986; 濱口・新井，1991)，社会的行動の産出モデルに「感情」

の構成要素を組み込んだものもある(相川ら，1993；濱口・新井，1991)．しかし，それらの論文においても感情や感情制御について十分に論じられてはいない．本論文では，子どもの感情と社会的行動，対人関係との関係について検討した論文を概観し，考察を加えていきたいと思う．

感情についての新しい考え方として，その社会的機能が強調されている点があげられる．こうした点が社会的発達の研究者たちから徐々に注目を集め，社会的発達に対しての感情の研究がされ始めている．感情を合理的な思考を妨げ，もっぱら適応的な行動を阻害する存在とみる古典的な観点と異なり，機能主義者と呼ばれる最近の感情の研究者は，感情を本質的に適応的な機能を持つとみなしている(Fischer, Shaver & Carnochan, 1990)．例えば，Malatesta (1990)は，10の基本的感情についてその自己システム内での機能と対人関係における機能をあげ，それらの適応性を強調している(Table 1)．

しかし，実際の日常生活において，強い感情が喚起されたために冷静な判断を行なうことが出来ず，望ましくない結果を導いた経験は誰でも1つや2つは思い当たるであろう．果たして感情は本当に適応的であるといえるのであろうか．また，感情が古典的な考え方のように単に合理的思考を妨げるだけの役割しか持たないのであれば，なぜ自然淘汰の過程を経て退化することがなかったのであろうか．こうした問いに部分的に答えてくれるのが戸田(1992; Toda, 1985)の提唱している「アージ理論」である．

(1) アージ理論

進化による自然淘汰は大変厳しい過程であり，場合によっては無用にみえるものが保存されることがあっても，全く不要なものが拡大，発展することはありえない．単純には比較できないが，他の種と比べて人間の感情は高度に分化し，発展しているように思われる．「怒り」や「恐れ」といった感情にかぎれば，そのような感情に特有の闘争，脅し，攻撃といった「状況対処行動」はずいぶん原始的な動物においてもみることができる．このような状況対処行動を起こさせる仕組みを感情の起源とみると，感情は，状況対処行動のシステムとして何億年という年月をかけて動物の種の進化と共に進化し，その間に大きなシステム的拡大と複雑化を達成してきたものという仮説を立てることができる．この仮定に従

Table 1　感情のシグナル的特質と適応的機能

感情	誘発因	自己システム内での機能	対人システム内での機能
怒り Anger	目標遂行の阻止	目標に対する障壁や阻止している対象を除去する	攻撃が起こる可能性を警告する
悲しみ Sadness	価値ある対象の喪失：有効性の欠如	この先に心的外傷を起こしうる活動を減らし，エネルギーを保存する	養護，共感，支援を誘発する
恐れ Fear	危険性の認知	恐怖対象を特定化する：逃走または攻撃を促進する	服従することを伝え，攻撃をかわす
軽蔑 Contept	優越性の認知	自覚，社会的地位，優位性を構成し，維持する	他者への優位性を伝える
恥／はずかしさ Shame/Shyness	自己が強く注目の的になっていることの認知	さらにプライバシーが侵害されることから自己を守る行動を産出する	プライバシーの保護を求めることを伝える
罪 Guilt	悪いことを行ってしまい，逃げ出すことが不可能だということの認知	償いを試みることを促進する	攻撃される可能性を減少させるために服従的態度をとる
嫌悪 Disgust	有害な物質や人物の認知	有害な物質の拒絶	受け入れる気のないことを伝える
興味／興奮 Interest/Excitement	新奇性，不一致，期待	情報摂取のために知覚システムを開く	受け入れる気があることを伝える
喜び Joy	親近性；心地よい刺激	現在の活動を持続することを自己に伝える	良い感情によって社会的つながりを促進する
驚き Surprise	新奇性の認知；予想と異なる事態	新しい経験に対しての準備のためにチャンネルをクリヤーする	何も知らないことを示し，攻撃から自己を守る

Malatesta (1990)より作成

えば，人間という新種が数百万年前に地球上に出現したときは，感情は人間にとってとても合理的な存在であったと考えるのが自然である．その一方，今の世の中でいわゆる「感情に流された」人間がいろいろおかしな行動にでるのをみると，現時点では感情が非合理的な側面を持っていることも否定できない(戸田，1992)．

こうしたパラドックスを解くために，アージ理論では「感情の野生合理性」という考え方をとっている．文明社会と違い，野生環境では似たような状況が頻発し，それにたいする対処行動も似たようなものであり，しかも生存にかかわる問題解決に対する時間圧は高い．そうした場合，状況を評価し，それに最もあう対処行動をその時その時に認知的に産出し，実行に移すことは，非効率的であり，しかも時間を必要とすることから野生環境においてはリスクを高くする．そこで，人間は進化の過程で状況を評価した後にすぐにそれに対応する感情を喚起させ，さらにそれに対応する対処行動を特に自覚する必要もなく，自動的に行なうように遺伝的にプログラムされてきたと考えられる．野生環境においては，対処行動を自動的に素早く行なわせる感情システムは非常に適応的であり，これが人間において感情が発展した理由であると考えられる．

ところが文明化によって，人間を取り巻く環境は生物学的進化のスピードよりも遥かに速く変化してきた．毎日の生活で起きることは非常に多様で，したがってそれに対しての対処行動もステレオタイプなことではなく，様々なことが要求される．しかも，瞬時の決断が生存にかかわっていた野生環境とは異なり，文明社会では時間圧が少ない．感情のもつ「今，ここでの解決を何よりも優先にする」という「今，ここ原理」は，野生環境では合理的なものであったが，対人関係を含めた環境が複雑化した現在では，かえって望ましくない結果につながることがある．環境の変化に人間の心的メカニズムの変化が追い付いていないことが，現代において感情に流された行動がしばしば不適応である原因とアージ理論では考える．

また，アージ理論では，野生環境においては感情に集団を統制する重要な役割があると仮定している．身体的に弱い人間が現代まで生き延びてきた大きな要因として，集団で協力しながら生活してきたことが挙げられよう(Toda, 1985)．推論能力が充分に発展していなかったと考えられる太古の人間が，「協力することが個人のためにもなる」ということを合理的に判断して，集団を維持していくことは大変困難であったにちがいない．そこで，深く思考することなしに個々の人間を結果的に協力へと向かわせる「社会的アージ(social urge)」が発達した．「怒り」「誇り」「恥」「愛情」など，多くの感情が集団を制御するうえで適応的な機能をもっていると仮定している．

ただし，こうした社会的アージが適応的であるのは，野生環境での原集団においてのみであったと考えられる．ここでいう原集団とは，10数人程度で形成され，お互いがお互いをよく知っており，線形順位制(集団のメンバーのほぼ全員が「偉さ」の順でリーダーをトップとして上から下へ大体直線的に順序づけられる構造)よって成り立っている集団を指す．しかし，複雑化した文明社会における人間集団は，原集団とは大きく異なってしまい，もはやアージシステムで集団を制御することが困難となってきた．そのために取られた手段が，それまでアージシステムが行なってきた集団制御機構を社会ルール化(儀礼化，制度化，成文法化など)することだったと考えられる．

以上述べてきたように，戸田の提唱したアージ理論では，多くの感情がシステムとして働く感情アージは野生環境においては非常に適応的な機能をもっていたが，高度に文明化した現代の環境においては，必ずしも合理的に機能するとはかぎらないことを提唱している．しかしながら，現代においても感情は，ネガティブにしろポジティブにしろ人間行動に大きな影響を与えていることは否定できない．人間も環境に適応しなくなってきた感情をただほうっておいたわけではない．感情を制御し，社会化すること，そのことが現代の人間にとって，特に対人関係を維持するうえで重要になってきたと思われる．

(2) 感情表出と感情シグナル

感情の表出に関する研究は，乳幼児の感情を研究する方法として多くの心理学者から注目されている．特に，Izardによって開発されたMAX (Maximally Discriminative Facial Movement)は，多くの研究で使用されている測度である．MAXシステムは，27の要素を特定化しており，その内の26は，10の基本的感情を特徴づける顔の筋肉の動きのパターンであり，残る一つは視線または頭の方向についてである(Campos, Barette, Lamb, Goldsmith & Stenberg, 1983)．

MAXシステムは，仮定している基本的感情の数や種類についての疑問(Otony & Turner, 1990)および表情と主観的感情体験との対応(この表情が見られるから，この感情を感じているとする)についての妥当性の乏しさなどの問題があるが，人生初期の

感情の有効的な指標として多くの研究で使用されている．

また，他者の表情の理解も乳幼児期のかなり早い時期から発達しており，子どもにとっては未知の場面や人を理解する際の情報として利用される(高橋，1990)．これはsocial referencingとよばれ，言語理解が十分に発達していない時期の子どもにとっては重要なコミュニケーションの情報源となる．

表情による感情の表出やsocial referencingの持つ対人的な役割を重視するために，Campos, Campos & Barrett (1989)は従来使われてきた感情表出(emotional expression)よりも感情シグナル(emotional signal)という用語の方がより適切なのではないかと主張している．

(3) 感情の制御の発達

Lewis, Sullivan & Vasen (1987)は，2，3，4，5歳児と成人の被験者に対して，喜び，悲しみ，驚き，怒り，恐れ，嫌悪の表情を作らせ，その正確さをMAXシステムで評価した．その結果，2歳児ではどの表情も正確に作ることは出来ず，3歳児では喜びと驚きは作ることが出来はじめ，4，5歳児では驚きと怒りのみが可能で，成人と異なっていた．成人でさえも，怒りと嫌悪の表情を十分に装えなかった．自発的な感情表出のレパートリーがかなり早い時期に成人と同じ程度になると考えられているのに対して(Izard & Malatesta, 1987)，随意的な表出の制御は幼児期に徐々に可能となるが，成人でも十分に制御できない表情のあることが示されている．

Saarin (1984)は，小学1，3，5年生を対象に，期待していたものと違うものをプレゼントされたときにどのような表出行動を見せるかを観察し分析を行なった．その結果，学年が上がるにつれネガティブな行動を抑制し，ポジティブな行動を見せるようになり，男女別にみると男児より女児の方がネガティブな表出行動をより抑制する傾向が見いだされた．このような学年差や性差が生じた理由として，Saarin (1984)は学年差に関しては表示規則の獲得の程度，性差については表示規則を実行するかどうかの動機づけの差の観点から考察を行なっている．

平林・柏木(1993)が指摘している様に，感情表出の制御に関する発達心理学的研究の多くは社会的表示規則の知識を獲得しているかという認知発達の観点から研究されている．しかし，知識を獲得していても実際に行動に移さない場合もあり，今後は知識を行動に移す際の動機やそれに影響する社会的文脈を明らかにする必要があろう．それによって，年齢差，性差，文化差，あるいは個人差などの生ずるメカニズムが解明されることが期待される．

(4) 感情コンピテンス

子どもが成長するにつれ，感情をそのまま表出するのではなく社会的に認められた形式で，対人的な相互作用の文脈に沿って表出することが望まれるようになってくる．また，場合によっては感情を抑制したり，偽って表出しなければならないこともある．その反対に，相手の表情は常にその人の本当の感情を表したものとは限らないことを理解し，表情の情報だけに頼らずに相手の感情を推測する能力が必要とされてくる．Saarni (1990)は，対人関係における感情の役割を重視し，感情コンピテンス(emotional competence)の概念を提唱した．感情コンピテンスとは，子どもが文化的に価値づけられた感情－意味システムに社会化されるために課せられた社会的要求の文脈において感情を理解する能力，ならびに感情を誘発するような社会的相互作用の文脈においての自己効力であるとされる．Saarni (1990)は，感情コンピテンスの要素とスキルとして以下の11を挙げている．

1．自分の感情状態と複数の感情が同時に存在する可能性についての認識，さらに人は自分自身の感情について気づいていないこともあることの認識．
2．他者の感情を推測する能力．
3．自分の文化(下位文化)において，広く有用な感情と感情表出を示す語彙を使用する能力．
4．他者の感情体験に共感的に関与する受容力(capacity)．
5．内的感情状態は必ずしも外的感情表出に対応していないということを理解する能力．
6．文化的表示規則(cultural display rules)の認識．
7．他者の感情体験を理解する際に，その個人に関する特別な情報を考慮する能力．
8．自分の感情表出行動が他者に影響を与えることを理解する能力と，自己呈示方略においてそのことを考慮する能力．
9．嫌悪，あるいは苦痛な感情に対する適応的なコーピング能力．
10．感情がどの程度直接的で互恵的，あるいは均整がとれているかによって対人関係の質が，部分的に定められるということの認識．
11．感情の自己効力に対する受容力；個人が，自分はだいたい感じたいと思っている感情を感じていると見なしているか．

感情コンピテンスは，特に意図されない社会的相

互作用の結果として獲得されていく．上に挙げたスキルについては，感情のモニターおよび制御，他者の感情推測，自己効力など多くの領域で研究が行なわれている．特に，感情表出の制御と社会的表示規則(social display rules)の理解は，対人関係に重要な役割を果たすものとして注目されている．

（5）感情の制御と仲間関係

Saarin (1990)が提唱した　感情コンピテンスの考え方にみられるように，多くの研究が感情表出の制御が対人関係に大きな影響，しかもプラスの影響を与えるという暗黙の前提のもとで行なわれている．しかし，感情表出の制御が実際に対人関係に与える影響を系統的に調査した研究は非常に少ない．その中で，平林の一連の研究(1992，1993a，1993b，1993c；平林・柏木，1993)は，制御される感情の質や制御する動機の違いが，感情表出の受け手側の認知にどのような影響を与えるかを検討している．

平林(1993a)，平林・柏木(1993)は，小学3，5年生と中学1年生に対してポジティブな感情表出を制御する4つの場面(「相手への配慮」「自分が得をするため」「照れ隠し」「社会的，道徳的規範の維持」)と，ネガティブな感情表出を制御する4つの場面(「周囲への配慮」「自尊心の維持」「社会的，道徳的規範の維持」「相手の意図への配慮」)で自分がどれくらい気持ちを隠すかを評定させ，学年差，性差の分析を行なった．その結果，ポジティブな感情の制御は「自分が得をするため」(有意差なし)を除いて学年が上がるにつれ高くなる傾向がみられた．ネガティブな感情の制御では，「周囲への配慮」と「社会的，道徳的規範の維持」において学年差がみられ，「周囲への配慮」では5年生が3年生よりもネガティブな感情を抑制するのに対して，「社会的，道徳的規範の維持(遅れてきた友達に対してネガティブな感情表出を隠すか)」では，小学3年生よりも中学1年生の方が感情表出を抑制しない傾向がみられた．その理由としては，高学年になると表出してもよい場面あるいは表出すべき場面を詳細に区別しはじめ，状況によってはネガティブな感情表出をしたほうがよいという理解が進んできたからであると考察されている．

さらに，感情表出の制御とソシオメトリックテストで得られた仲間からの評価との関係の分析では，感情表出を制御する者がどの場面でも仲間からの評価が高いという結果は得られず，逆に自己保護的な動機(自分が得をするため，自尊心の維持)で感情表出を制御する人は，仲間からの評価が低いことが見いだされた．また，小学5年生では，相手や周囲への配慮場面で感情表出を制御する人は仲間からの評価が高いという結果が得られたが，中学1年では逆に制御しないものが評価が高いという結果が得られている．その理由として，感情表出の制御に対する考え方の変化が影響していると考えられ，中学1年では親しい友達に対してならば，自分の感情を率直に表出してよいと考えるようになり，結果として親しい友達が多いほど感情表出を制御していないからだと考察している．この結果の解釈については，平林(1993c)が成人の被験者に対して行なった調査で，表出対象(相手)との親しさが感情表出をするかどうかを左右する重要な要因であることを見いだしており，部分的に検証されたといえよう．

感情表出の制御は，単に社会的表示規則の知識がある，ない，また制御できる，出来ないという問題だけでなく，適切な場面で適切な相手に対して制御を行なう，行なわないという目標設定を含む動機づけなどが関与する複雑な過程であり，これらの過程が社会化を通していかに形成されていくかを明らかにしていく必要があるだろう．

（6）対人不安とシャイネス

Gresham (1986)の社会的スキル問題の分類にみられるように，対人的な場面で知識としてはどうすべきかが理解されていても，適切な社会的スキルを実行できない場合がある．社会的刺激によって喚起され，その質と強度によっては社会的行動を抑制し，生体に対するストレッサーにもなりうる対人不安(social anxiety)あるいはシャイネス(shyness)と呼ばれる感情は，対人場面で生起する感情のなかでも最も重要なものの一つである．対人不安とシャイネスについての定義の統一は今だ得られておらず，ここでは特に両者を区別せずに用いていく．

Kagan, Reznick & Snidman (1988)は，乳幼児期から児童期にかけて縦断研究を行ない，2歳時に社会的行動において抑制的であった子どもの大部分は，7歳になっても静かで，見知らぬ子どもや大人との接触を避けようとし，2歳時に非抑制的であった子どもの大部分は，7歳時に話し好きで，相互作用を好むことを明らかにした．また，最初の査定で心拍数の高かった抑制的な子どもは，心拍数の低かった抑制的な子どもより7歳の時点で抑制性を残している傾向がみられた．このような結果から，何らかの生理学的基盤の差が小児期のシャイネスの個人差に寄与していることが考えられる．

加納・梅本(1994)は，6ヶ月から7歳までの子どもをもつ母親に対して質問紙による調査を行ない，「恥ずかしさ」の質的な分類およびその発達的変化

を検討している．その結果，恥ずかしさを誘発するような25の場面に対する回答に主成分分析を行ない，８つの主成分(「照れ」「罪悪感を伴った恥」「対人緊張」「とまどい」「恥じる(失敗したときなど)」「きおくれ」「恥じらい」「当惑」)を抽出している．発達的変化では，(1)罪悪感を伴った恥は７歳児までではあまり生じない，(2)鏡をみている自分を他者からみられて，はずかしそうにするという状況は３，４，５歳児のみにみられた，(3)３歳児は，なにか行動した結果はずかしさを感じるのではなく，他者からみられるだけで恥ずかしがることが多かった，(4)３歳児以降の年長の子どもたちは，当惑，対人緊張，照れ，罪悪感を伴った恥が，１，２歳児よりも多かった，という結果が得られている．

対人不安，シャイネスに関する研究は，気質の個人差の観点から行なわれる乳幼児の行動を指標にしたものや青年期を対象としたものがほとんどで，児童期を対象としたものは少ない．その中で，La Greca, Dandes, Wick, Shaw & Stone (1988)は，児童用の質問紙を開発し，児童期(小学２，３，４，５，６年生)の対人不安に関する研究を行なっている．質問紙は，「否定的評価の恐れ(fear of negative evaluation)」と「対人的回避と苦痛(social Aaoidance and distress)」の２因子からなることを明らかにした．分散分析の結果，学年が低いほど対人不安が高く，女児の方が男児よりも対人不安が高いことが示された．また，社会的地位の異なる群ごとの平均点を算出したところ，無視児(neglected)が，最も対人不安が高いことが明らかになった．また，Vernberg, Abwender, Ewell & Berry (1992)は，La Greca et. al. (1988)の開発した尺度の改訂版を用い，引越をしたばかりの12歳から14歳の被験者の対人不安を測定し，対人不安が新しい友人関係を形成する際の仲間づきあいと親密さに影響を与えることを見いだしている．

対人不安とシャイネスは，対人的場面における生理的，認知的，行動的観点を統合した理解が求められる研究領域であり，そのメカニズムの解明は子どもの社会的発達の理解，発達臨床心理学での応用に大きな貢献をすると思われる．

２．社会的場面における目標に関する研究

自ら目標を設定し，それに向かって意図的に，持続的に努力できることは，人間を他の存在と区別する際の重要な側面であると考えられる．社会的場面における子どもの目標について焦点を当てた研究は，現在までのところ非常に少ない．多くの研究者は，現在の心理学の研究はコンピューター・アナロジーにもとづいた認知心理学的アプローチが主流であり，そこでは目標，あるいは目的という概念が欠落していたと述べている．そして，これは子どもの社会性に関する領域でも例外ではないと思われ，この領域で目標という観点から行われた研究は極めて少ない．

コンピューターやそれ以外の人間が作り出した機械の場合は，目標を有するのはそれを操作する人間であり，その機構自体には目標を設定するユニットをほとんどの場合は有しない．サーモスタットを持つ機械の場合は，セットポイントという目標値に合わせて行動を調整できるが，その目標値自体を設定するのはやはり人間という外部の存在である．それに対して，社会的場面におかれた人間の場合を考えてみると，自分で目標を設定し，それに向けて行動をせざるを得ない状況と考えられる．Renshaw & Asher (1982, 1983)は，日常の対人的相互作用場面での問題解決は，認知的な課題と異なって十分に構造化されているとはいえず，そのため，どのような目標に即して課題を解決していくかには，大きな個人差が存在すると述べている．そして，彼らの小学生を対象とした実証的研究において，異なる社会的地位の子どもは異なる目標設定をする傾向があることを見いだしている．

濱口(1990)は，社会的場面における目標設定を「他者とのやりとりの中で，個人がどのような結果の獲得を求め，どのような結果を回避しようとするかに関わる変数」と述べ，「その場面においてもたらされる可能性のある諸結果の各々に対して，相互作用を行う個人によって与えられる重み」として，操作的に定義している．濱口の一連の研究(1993a，1993b)では，挑発場面での社会的情報処理において，友好的であろうとするか，主張的であろうとするかといった「対人的目標設定」が社会的行動を予測する際の重要な変数であることを見いだしている．

また，Rabiner & Gordon (1992)は，社会的場面において児童が設定する目標はひとつではなく，複数のときもあるととらえている．仲間関係に問題を持つ子どもは，問題を持たない子どもと異なる目標を設定するだけでなく，同時に存在する複数の目標(例えば，ゲームに勝つことと仲間と良好な関係を保つこと)を高いレベルで統合する際に問題を持つ可能性があることを指摘している．小学生を対象とした彼らの研究で

は，拒絶児の中でもサブタイプ(攻撃的，従順)によって目標の統合において差が見いだされている．

3．社会的場面における感情，情報処理に影響を与えるconstructに関する研究

社会的場面において喚起される感情や行われる情報処理は，場面の特性によって完全に決定されるのでも，全くランダムに生じるのでもない．同じ場面であっても，個人間では差異が見られ，逆に異なる場面であっても，同じ個人内ではある程度の一貫性，安定性があるように思われる．

例えば，Dogde (1993)は，それまでの自らのモデルの限界を指摘した上で，社会的場面における情報処理に背後から影響を与えるものとして“knowledge structures”の存在を仮定し，行為障害と抑うつがどのように発達していくかについてのモデルを提唱している(Fig.1,2)．本節では，それぞれの社会的場面において背後から感情や情報処理に影響を与えると考えられるconstruct (心理学的構成概念)に関する理論について概観する．

(1) アタッチメントとInternal Working Models

人生初期の対人関係に関連する研究として乳幼児のアタッチメントについて数多くの研究が行なわれてきた．子どもの自己および他者認知は初期のアッタチメント関係の在り方によって左右される．この関係のなかで子どもは，他者は自分の要求に対してどの程度応じてくれる存在なのか，自分は他者からどの程度受け入れられている存在なのかという自己と他者の有効性に関する最初の内的表象を形成する．このような子どもの他者自己関係における認知構造をBowlbyは，internal working modelsと呼んだ．子どもが情緒的，認知的に成長するに伴い，こ

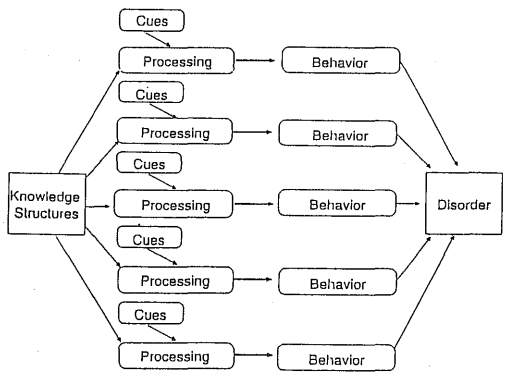

Fig. 1　心理的障害の発達における心的過程メカニズム(Dodge, 1993)

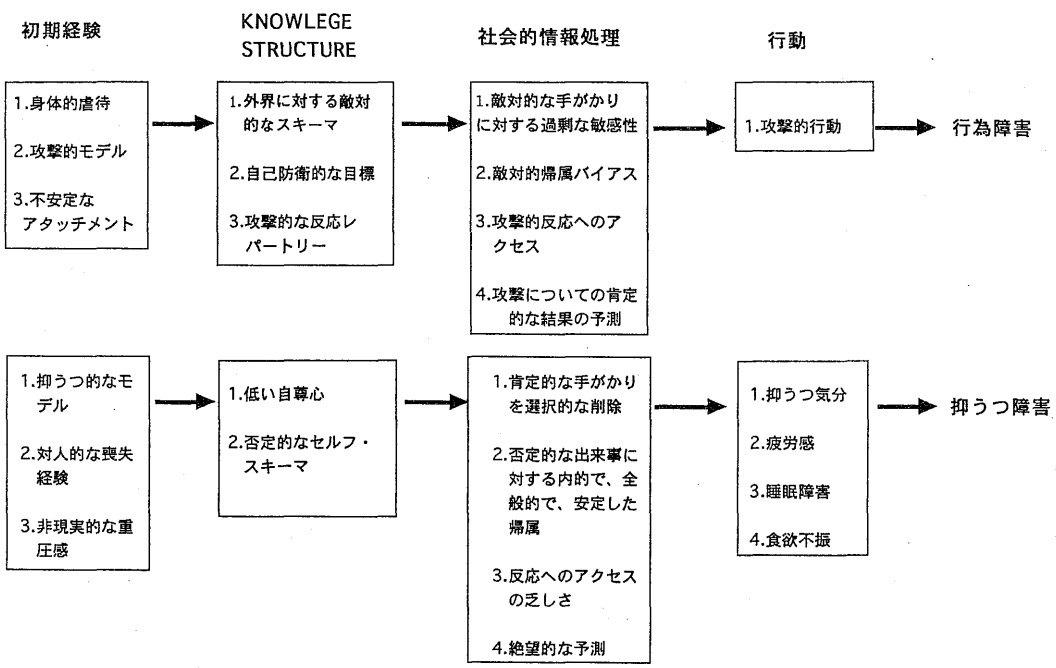

Fig. 2　Dodge (1993)による行為障害と抑うつ障害の発達モデル

の内的モデルは洗練されていくが，いったん形成されたモデルは意識の外で働き，そして新しい情報は現存するモデルに同化されるために，モデル自体にダイナミックな変化は起こりにくい傾向にある(戸田，1991a，1991b).

ワーキングモデルの考え方自体を乳幼児の行動指標から検討することは困難であるため，他者および自己に関する内的表象を言語化し，表現しうる児童期以降，主に青年期，成人期を対象に研究が行なわれている．詫間・戸田(1989)は，質問紙により被験者を以下の3群に分けた.

secure群；「たいての人は自分を好いてくれており，すぐに知り合いができる」という表象を強く持つ．乳幼児期のストレンジャーシチュエーションの分類ではBタイプに対応する.

avoidant群；「人と親しくなったり，親密な関係になったりすることをきらい，他者を全面的には信用できない」という表象を強く持つ．乳幼児期のAタイプに対応.

ambivalent群；「自分を信頼できなく，本当に人から好かれているかについても自信がない．人といつも一緒にいたがるので，疎ましく思われている」という表象を強く持つ．乳幼児期のCタイプに対応.

これら3群の初対面の場における対人的情報処理の差を検討した結果，ambivalent群は自分に対する相手の反応に強く影響を受け相手からの好意や関心を極端に解釈し，好意的なものに対しては強く相互作用を望み，そうでない相手とは極端に相互作用を避ける傾向がみられた．また，avoidant群は全般的に相手からの好意，関心を低く評価しており，相手の示す反応に関係なく相互作用を避ける傾向がみられた.

ワーキングモデルは，ネガティブな感情を適切にコーピングし，情緒的安定を得るための情報処理システムとして機能していると考えられている．Kobak & Sceery (1988)の大学生を対象とした研究で，乳幼児期のBタイプに対応する群では苦痛や不安を感じていないのは予想されるとおりであるが，Aタイプに対応する群でも孤独感は高いものの苦痛や不安は低いことが見いだされた．その理由としては，この群が他者の自分に対する好意や関心を過小評価し，距離をおいた対人関係を取り，ネガティブな感情を喚起する情報そのものを遮断することで苦痛や不安を避けていると考えられる．Cタイプに対応する群では，アタッチメントの対象を過度に理想化し，また不安や苦痛の最も高い傾向がみられた.

青年期においてみられるワーキングモデルの個人差が，乳幼児期と連続線上にあるかどうかはまだ仮説の段階に留まっている．熱田(1993)の研究のような，その間の時期である児童期，青年前期を対象とした研究はほとんど行なわれておらず，これらの空白時期についての研究，さらにはワーキングモデルの個人差と現在社会性の発達研究の主流である社会的スキル，社会的認知のアプローチから得られた知見を統合するような研究が期待される.

(2) Epsteinの「現実についての自己理論」

Kelly (1955)によると，科学者が実験室においてデータを体系的に理解し研究活動を方向づけるための理論を持つように，普通の人(lay person)もまた，日常生活における経験を理解し，様々な出来事を予測し，自己の行動を統制するための「理論」を持つとされる．これまで「科学者としての人間モデル」では，多くが「意識的」な理論(認知)のみを取り上げてきた．これに対して最近の認知心理学は，「意識的」な認知だけでは片手落ちであり，「前意識的・無意識的」な認知の重要性を認めるようになってきた(辻・向山，1993)．辻・向山(1993)が，例としてあげているように「理屈ではするべきだと思うが，気が進まない」という経験を思い浮かべれば，意識的認知(理屈)と前意識的認知(気)とが異なる体系に属することが理解できるように思われる.

Epstein (1990)によれば，各人が持つこのような「個人的理論」は，体系化されて「現実についての個人的理論」と呼ばれる概念体系を構成するという．現実についての個人的理論は，4つの基本的機能を持つと仮定されている．すなわち，(1)経験的データを同化すること(これには，この概念体系そのものの一貫性や統合性を維持する要求が含まれる)，(2)快・不快のバランスを最大にすること，すなわち，快楽を最大にし，苦痛を最小にすること，(3)他者と好ましい関係を維持すること，(4)自尊心を好ましい水準に維持することである．行動は，この4つの機能(あるいは動機)の妥協の産物だと考えられている.

現実についての個人的理論は，もともと意識的に形成されたものではないので，多くは前意識的であると考えれられている．したがって，問われれば誰でも自分の理論が説明できるというわけではない．Epsteinは，個人的理論にアクセスする方法として，喚起された感情や反復して現れる感情的行動を観察することをあげている．つまり，前意識的な存在である個人的理論は感情と密接な関係にあるといえよう．Epsteinは，前意識的動機を最も重要な行動決定因であると考えている．その理由としては，日常

的な経験や行動を体制化し方向づけているのはimplicitな信念や価値観であり，それが前意識水準にあると考えるからである．しばしば態度から行動が予測できないのは，意識的態度しか測定していないからであると考えられる．これは，cold cognition, つまり意識的な認知を重視する認知心理学者や無意識的動機を重視する精神分析学の学者とも異なる．

Epsteinの現実についての個人的理論の考え方は，壮大なスケールを持つ．ここでは，子どもの社会性を理解する目的に限定して，その可能性について考えてみたい．現在の子どもの社会性に対するアプローチの多くは，意識水準にしか焦点を当てていないように思われる．例えば，合理的な情報処理や知識という面から考えると年齢が上がるにつれて情報処理能力はより精緻化され，知識は増加していくと思われる．では，算数の問題やパズル課題の成績が上がり，できないことが少なくなっていくように，子どもの仲間関係は年齢が上がるにつれて問題が少なくなるといえるであろうか．理屈で分かっていることを，全て問題なく社会的行動として実行できるのであれば，この質問の答えはYesであろう．しかし，実際にはそうとはいえない．つまり，仲間との社会的場面においては「理屈では分かっていても，気がすすまない」あるいは「理屈では分かっていても，できない」ことが多いのではないのではないだろうか．

したがって，Epsteinの言うように「気がすすまない」という前意識的水準での認知，あるいは感情について焦点を当てることをしなければ，子どもの社会性の理解も片手落ちであるといえよう．すなわち，子どもが自己・他者，さらに仲間関係の場面で両者を支配しているような，前意識的な認知である「個人的理論」をとらえることは，子どもの社会性研究にとって大きな貢献をするものであると期待される．

まとめ・今後の課題

以上のように，感情や目的などの動機づけ要因は子どもの対人関係や社会的行動などに影響を与える重要な変数であると考えられ，これらを無視しては現実の子どもの社会性の深い理解や援助法の開発などは困難であると思われる．今後さらにこれらの知見を基に実証的な研究が積み重ねられることが期待される．しかし，研究を行っていく上でいくつかの問題が残されており，最後にそれらについて簡単に触れておく．まず，本論では，「感情」とひとまとめにして論じてきたが，特殊な機器を使用して測定される生理的レベル，本人が意識してない場合でも表情，身ぶり，口調などに現れる表出のレベル，それから本人の主観的感情経験として意識されるレベルなど同じ感情でもレベルの違いが考えられることである．こうした感情のレベルの違いを考慮しつつ，多角的な視点から感情をとらえ，社会性との関連が検討されることが望まれる．また，これらに関係して感情の測定の問題がある．子どもの感情についてより信頼性の高い，簡便な測定法が開発されることも望まれる．

目標についても同様な問題があり，子ども本人が意識できるレベルでの目標だけを測定し，意味のあるものとするのではなく，Epsteinの個人的理論のように，前意識的レベルでの目標，さらには無意識的レベルでの目標もとらえるなのかもしれない．しかし，このためには困難な伴う測定の問題がある．

最初に述べたように，行動主義の流れをくむ社会的スキルのアプローチや認知主義の流れをくむ社会的情報処理のアプローチは，子どもの社会性の理解と臨床的応用において多大な貢献をしている．しかし，既存のアプローチに加えて動機づけからのアプローチが確立され，子どもの社会性にとって重要な動機づけの測定が可能になり，そうした動機づけに対する介入が可能になれば，社会性につまずきを持つ子どもの理解と援助はさらに効果的になると思われ，この領域の研究のさらなる発展が待たれる．

要　約

本論では，子どもの社会性に関する現在のアプローチの限界を指摘し，動機づけの役割を重視したアプローチの意義を主張した．その上で，動機づけ要因の中でも感情と目標の観点から子どもの感情と社会性の関連についての研究を概観し，考察を行った．その結果，感情と目標は，子どもの社会的発達において重要な役割を果たしていることが示唆された．

最後に，子どもの社会性に対する動機づけからのアプローチについて今後の課題と可能性についても考察を行った．

引　用　文　献

相川　充・佐藤正二・佐藤容子・高山　巌　1993　社会的スキルという概念について－社会的スキルの生起過程モデルの提唱　宮崎大学教育学部紀要，**74**，1-16.

熱田恭子・繁多　進　1993　インターナルワーキングモデルの構造と変化　日本発達心理学会第4回大会発表論文集，139.

Blondizar, J.P., Perry, D. & Perry, D. 1989 Outcome values and agression. *Child Development,* **60**, 571-579.

Campos, J.J., Barrett, K.C., Lamb, M.E., Goldsmith, H.H. & Stenberg. C. 1983 Socioemotional development. In Mussen, P.H. (Ed.) *Handbook of child psychology:* Volume II Infancy and developmental psychology, John Wilkey & Sons, Inc.

Campos, J.J., Campos, R.G. & Barret, K.C. 1989 Emergent themes in the study of emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology,* **25**, 394-402.

Crick, N.R. & Ladd, G.W. 1990 Nominator attrition: Does it affect the accuracy of children's sociometric classifications? *Merril Palmer Quarterly,* **35**, 197-207.

Dodge, K.A. 1993 Social-Cognitive mechanisms in the development of conduct disorder and depression. *Annual Review of Psychology,* **44**, 559-584.

Dodge, K.A., Asher, S.R., & Parkhurst, J.T. 1989 Social Life as a coordination task. In Ames, C. & Ames, R. (Eds.) *Research on Motivation in Education (Vol.3),* pp.107-165, Academic Press.

Dolgin, K.G. 1986 Need steps for social competence: Strengths and present limitations of Dodge's model. In Rerlumer, M. (Ed.) *Cognitive perspectives on children's social and behavioral development* 127-135.

Epstein, S. 1990 Cognitive-experimental self-theory. In Pervin, L.A. (Ed.) *Handbook of Personaliyt: Theory and research.* Guilford Press.

Fischer, K.W., Shaver, P.R. & Carnochan, P. 1990 How Emotions develop and how they organise development. *Cognition and Emotion,* **4**, 81-127.

Gresham, F.M. 1986 Conceptual Issue in the assessment of social competence in children. In Strain, P.S., Guralnick, M, J.& Walker, H.M. *Children Social Behavior.* 143-179, Academic Press.

濱口佳和　1990　Provocation場面における児童のSocial Competenceの研究－社会認知的変数の測定とそれに関連する要因の検討－　筑波大学修士論文.

濱口佳和・新井邦二郎　1991　児童の社会的コンピテンスへの接近法についての考察－場面特殊的－内潜的過程アプローチの提唱　筑波大学心理学研究，**13**，185-202.

濱口佳和　1992a　挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究　教育心理学研究，**40**，224-231.

濱口佳和　1992b　挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究－仲間集団内での人気ならびに性の効果－　教育心理学研究，**40**，420-427.

平林秀美　1992　感情表出のコントロール場面の検討　日本発達心理学会第3回大会発表論文集，90.

平林秀美　1993a　感情表出のコントロールの差異が対人関係に及ぼす影響（1）　日本発達心理学会第4回大会発表論文集，27.

平林秀美　1993b　感情表出のコントロールに対する認識－表出対象によるコントロールの差異を中心に－　日本教育心理学会第35回総会発表論文集，14.

平林秀美　1993c　感情表出のコントロールの差異が対人関係に及ぼす影響（2）　日本心理学会第57回総会発表論文集，666.

平林秀美・柏木恵子　1993　情動表出の制御と対人関係に関する発達的研究　発達研究，**9**，25-40.

Izard, C.E. & Malatesta, C.Z. 1987 Perspectives on emotional development I: Differential emotions theory of early emotional development. In Osofsky, J.D. (Ed.), *Handbook of infant development (2nded).* Wiley-Interscience.

Kagan, J., Reznick, J.S. & Snidman, N. 1987 The physiology and psychology of behavioral inhibitation in children. *Child Development,* **58**, 1459-1473.

加納真美・梅本堯夫　1994　はずかしさの発達的研究－質的分析－，発達研究，**10**，31-46.

Kelly, G. 1955 *The psychology of personal constructs.* Norton.

Kobak, R.R. & Sceery, A. 1988 Attachment in late adolescent; working models, affect, regulatiion and representation of self and others. *Child Development,* **59**, 135-146.

LaGreca, A.M., Dandes, S.K., Wick, P., Shaw, K. & Stone, W.L. 1988 Development of the social anxiety scale for children: reliability and concurrent validity. *Journal of Clinical Child Psychology,* **17**, 84-91.

Lewis, M., Sullivan, M.W. & Vasen, A. 1987 Making faces: age and emotion differences in the posing of emotional expressions. *Developmental Psychology,*

23, 690-697.

Malatesta, C.Z. 1990 The role of emotions in the development and organization of personality. In Thonpson, R.A. (Ed.) *Socioemotional development,* University of Nebraska Press.

村田孝次 1990 発達心理学史入門 培風館.

丹羽洋子 1993 教室における情緒的－認知的動機づけ 風間書房.

Otony & Turner 1990 What's basic about emotions? *Psychological Review,* **97**, 315-331.

Ranbiner, D.L. & Gordon, L.V. 1992 The coordination of conflicting social goals: difference between rejected and nonrejected boys. *Child Development,* **63**, 1344-1350.

Renshaw, P.D. & Asher. S.R. 1983 Children's goals and strategies for social interaction. *Merril Palmer Quarterly,* **29**, 353-374.

Saarin, C. 1984 An observational study of children's attempt to monitor their expressive behavior. *Child Development,* **55**, 1504-1513.

Saarni, C. 1990 Emotional competence: how emotions and relationships become integrated. In Thonpson, R.A. (Ed.) *Socioemotional development,* University of Nebraska Press.

Sorrentino, R.M. & Higgins, E.T. 1986 Motivation and cognition: warming up to synergism. In Sorrentino, R.M. & Higgins, E.T. (Eds.) *Handbook of motivation and cognition.* 1-19, The Gulferd Press.

高橋恵子 1990 乳幼児の認知と社会化 無藤隆・高橋恵子・田島信元編 発達心理学入門Ⅰ 東京大学出版.

高野清純 1994 事例発達臨床心理学事典 福村出版.

詫磨武俊・戸田弘二 1989 愛着理論からみた青年の対人態度－成人版愛着スタイル尺度作成の試み－ 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.

戸田弘二 1991a アタッチメントとその後の人間関係 繁多進編 社会性の発達心理学 福村出版.

戸田弘二 1991b Internal Working Models研究の展望 北海道大学教育学部紀要, **55**, 135-143.

Toda, M. 1985 Emotions viewed as tightly organized, genetically determined system of behavior-selection programs. In Spence, J. & Izard, C. (Eds.) *Motivation, emotion, and personality.* Amsterdam.

戸田正直 1992 感情－人を動かしている適応プログラム 東京大学出版会.

辻平治郎・向山泰代 1991 Epsteinの経験的自己理論とCTI(建設的思考尺度) 甲南女子大学研究紀要, **27**, 33-66.

Vernberg, E.M., Adwender, D.A., Ewell, K.K. & Berry, S.H. 1992 Social anxiety and peer relationships in early adolescence: A prospective analysis. *Journal of Clinical Child Psychology,* **21**, 189-196.

—1995. 9 .30受稿—